



自動車と自転車

日本の経済の力は、規模からいっても、その安定性からいってもミドルクラスで、国民生活の1つ1つがその分に応じた様式をとるとすれば、まあ自動車よりも自転車で、日本の自転車も世界的には随分有名になつたが何でも分以上のことをするのが好きな日本のこと、この頃では自動車の普及も騒々しいほど目ざましい。

本県ではそれでも自動車の普及は漸進的で、都会生活者にはありがたい話だが、考えて見れば、自動車も何も通らないのんびりした生活というものもまた懐しい。

自動車登録車輛台数 茨城県陸運事務所

種別	昭和32年 3月31日	昭和33年 3月31日	1年間の増
总台数	20,324	23,690	3,366
貨物用	17,255	20,079	2,824
乗合用	775	813	38
乗用	1,741	2,122	381
特種用途	528	643	115
特殊車	25	33	8

上の数字で見ると、本県では、自動車総台数でも16.4世帯に1台、87.7人に1台の割で、自家用乗用車となると354世帯に1台、1,892人に1台となる。

しかし自転車となると、事情は一変する。下の数字を御覧願おう。

昭和32年4月1日

自転車			リヤカー	原動機付自転車		
課税台数	非課税台数	合計		第一種	第二種	合計
373,307	16,202	389,509	66,250	5,623	20,009	25,632

リヤカーを除いた自転車の台数は0.9世帯に1台、5人に1台の割となる。どの家庭にも自転車のある勘定だ。

ちなみに1台あたりの人口数では、本県は全国で17位全国最高は滋賀県、最低は長崎県である。

次に外国における自転車の普及度を参考に供しておこう。

国別	人口	自転車保有台数	保有率
デンマーク	4,439	3,000	1.5人に1台
オランダ	10,751	5,500	2.0 //
スエーデン	7,262	3,500	2.1 //
スイス	4,977	1,858	2.7 //
ベルギー	8,868	2,913	3.0 //
西ドイツ	49,995	16,000	3.1 //
ノルウェー	3,425	1,000	3.4 //
イギリス	51,215	14,000	3.7 //
フィンランド	4,241	1,100	3.9 //
フランス	43,274	8,780	4.9 //
日本	89,275	15,650	5.7 //
シンガポール	1,290	225	5.7 //
オーストラリア	9,500	1,500	6.3 //
イタリア	48,016	7,200	6.7 //
アメリカ	167,440	25,000	6.7 //
台湾	8,907	1,000	8.9 //
南ベトナム	10,000	1,000	10 //
タイ	20,302	2,000	10 //
カンボジア	4,358	400	11 //
インドネシア	81,976	5,000	16 //
スペイン	28,976	1,700	17 //
白領コンゴ	12,600	766	17 //
イラン	21,146	850	25 //
ナイゼリア	31,254	900	35 //
ビルマ	19,434	500	39 //
オーストラリア	6,974	150	47 //
ヨルダン	1,427	30	48 //
イラク	5,200	100	52 //
シリヤ	4,145	70	59 //
ブラジル	58,456	900	65 //
インド	381,690	5,500	69 //
ポ領アフリカ	6,040	70	86 //
パキスタン	82,439	600	137 //
メキシコ	29,679	150	198 //

新市町村の横顔

やまと 大和村



稲田村長

この村は真壁郡の北端に位置し、東は加波山嶺を境として新治郡八郷町に、西はわずかに真壁郡協和村へ、南は同郡真壁町に、北部は大きく広がって西茨城郡岩瀬町にそれぞれ隣接している純農村で、雨引地区は高台、森林が多く、大田地区は平坦で地味豊かな耕地に恵まれている。昔この地方は新治県と称して国造の治めるところであったが、孝徳天皇時代に新治郡となり、清寧紀天皇によって白髮郡、白壁郡などその後幾多の地名と属領の変せんがあつて徳川時代に入つては、笠間藩の領地と幕府直轄地や旗本の采地が入り乱れてあつたようである。そして明治4年の廃藩置県の際は若森県に入り、翌5年には新治県、同8年には茨城県にそれぞれ編入されたのである。さらに昭和29年1月22日には、雨引、大田の両村が合併して、従来縁故などにちなみ、大いに和するの意をもつて、新しく大和村が誕生し面積29.13平方町、人口8,641人(男4,201、女4,440)、世帯数1,415となり(昭和33年6月毎月人口調査)全村民が明るい希望をもつて平和で住みよい新農村の建設にまい進している。

2. 産 業

まず農業面をみると、農家数1,174、農家人口7,213人(男3,534、女3,679)で全村の8割以上を占め、耕地面積1,224町(田554町、畑652町、樹園地18町)、山林農家所有544町、原野11町に達している。(昭和33年2月冬期調査)なかでも作付面積の多いのは大麦292町、小麦281町、大豆137町、たばこ101町、さつまいも83町などであるが、雨引地区は山麓地を利用したみかん、もも、ぶどうの果樹類やしいたけ、西洋まつたけの栽培が盛んで将来の発展が期待され、特にしいたけやすいかは品質も優秀で東京方面の好評を受けている。

次に畜産面を見ると、乳牛65頭、役肉用牛290頭、馬321頭、めん羊19頭、山羊179頭、豚294頭、兎100頭、にわとり8,035羽に達しており(昭和33年2月冬期調査)、酪農組合や養豚組合の育成指導と相まって経営の多角化と畜産化が進んできた。特に馬から牛へ切換える農家がこの地方にも多くなつたようである。又おもな農機具の利用状況を見ると、電動機430戸、石油発動機1,161戸、動力耕うん機71戸、動力脱穀機1,165戸、足踏157戸、動力糶すり機1,159戸、噴霧機301戸、畜力碎土機171戸、畜力カルチベーター201戸畜力すき890戸にのほり(昭和33年2月冬期調査)、動力畜力機械の利用が次第に普及してきたことが分る。町としても病虫害の防除を奨励し、動力噴霧機を12台購入貸付けを行つており、また大沼を利用した同水系一帯の水路開設には村費100万円を助成して、昭和30年から継続事業として実施し、さらに今年のかんがい対策としてはボーリング機械1台を46万円で購入し、20近くの水戸を掘上げてこれが灌水に万全を期した由。

4. 財 政

昭和33年度歳入歳入予算

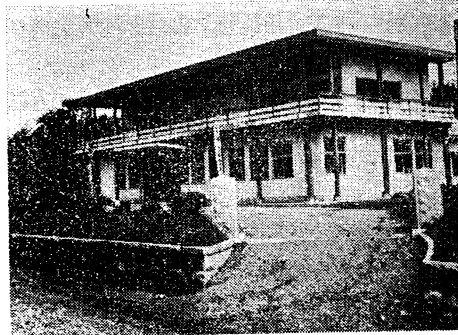
(単位円)

歳 入	村 税	地 方 税	交 付 金	企 業 及 び 財 産 収 入	使 用 料 手 数 料	国 庫 支 出 金	県 支 出 金	寄 付 金	繰 入 金	繰 越 金	雑 収 入	合 計		
入	16,524,500	9,960,000		1,206,270	158,600	338,300	1,047,600	1,575,100	30	50,000	15,000	30,875,400		
歳 出	議 会 費	役 場 費	消 防 費	土 木 費	教 育 費	社 会 労 働 保 健 産 業 施 設 費 衛 生 費 経 済 費	財 産 費	統 計 調 査 費	選 挙 費	公 債 費	諸 支 出 金	予 備 費	計	
出	890	7,065,400	2,520,300	819,900	4,831,200	557,700	3,604,300	1,611,800	93,300	461,300	1,349,500	6,836,700	100,000	30,875,400

次に鉱工業面を見ると、加波山麓から特産物として品質のよい花崗岩が産出され採掘業者も10を越え、石材加工業者も少くないので村としても大きな収入源となっている。

3. 教育文化

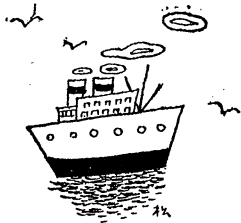
この村には小学校2(分校2)、中学校2あつて、小児児童1,294名(男678、女616)、中学生徒477名(男242女235)で(昭和33年5月学校基本調査)、村として昭和31年に東小学校の新築(505坪、工費1,500万円余)をはじめ昨年は中学校調理室(31.5坪60万円)の建築を行い、教育施設の拡充強化に努めている由。役場も建坪163坪2階建、工費483万円で本年5月に和洋折衷のスマートな新庁舎が完成した。国民健康保険組合も本年2月1日に全村加入を実施し、加入世帯は1,278、年間予算額638万円、保険料徴収率は80.9%なので趣旨徹底になお一層の拍車をかける必要があるようだ。消防施設は、分団19、分団員473名、可搬式動力ポンプ13台、廃用ポンプ5台、水槽21にのほつて立派な成績を取っており、さらに防火用深井戸開設を計画している。また納税組合は78で郡内でも優秀な実績をあげており、32年度の納税率は実に94%に達し、赤字財政の克服に努力を払っている。青年婦人団体の活動も盛んで、かまどの改善をはじめ映画会研修会の開催、農繁期の託児所設置、4日クラブの研究活動を行つている。名所旧蹟としては、用明天皇の御代に中国の帰化僧法輪居士の創立した雨引山薬法寺延命觀世音があり、関東における天台宗の名刹で古くから安産の祈願所として知られ、寺内には国宝指定の本尊の觀世音菩薩の立像、前立觀音像をはじめ、各種の貴重な宝物が、桜も多く、また眺望が優れた景勝地である。この外にも平将門墓跡、二宮尊徳翁の碑と青木堰、七ツ井などがある。



(完成した役場庁舎)

稲田村長の抱負

1. 旧村意識を解消するために努力し、道路橋梁の整備をするとともに農村電話を架設すること。
2. 文化センターを建設して生活文化教育面の施設整備と社会教育の指導体制を確立すること。
3. 村民の医療福祉を増進すること。
4. 農業協同組合や農業委員会と提携して、営農指導体制を強化し、かんがい排水施設を整備して土地生産力の増強を図ること。



8 月 の 北 海 道

～第九回全国統計大会に参加して～

津軽海峡は統計大会を祝してか波おだやかに、4,500トンの青函連絡船は快的な船旅であった。

東方洋上がしらみをはじめたころ、船内はいままで静寂を破り、ざわざわと下船の準備をはじめた。眼前には濃霧におおわれた港、函館がボーツと浮び出した。

いよいよ下船——

夏の朝とはいえ、鳥肌のたつような寒さ、それに舌にさわるとトリととけ、食道に流れこむソフトクリーム冷たさ、さすが雪印の国北海道だけありおいしく北海道に歩を進めたという感を深くした。

すぐアカシヤ、ポプラ並木の待つ札幌に向う。

車窓よりのエゾマツ、カラマツの若木は初秋を思わせ野辺の草花は薄紫色のものが多く、かよわい花を開き、まれに、内地のよそぐみに似た深紅の実をつけた植物が目にとまり、薄紫色と深紅の色が北国の情緒を漂わせていた。

函館から約40分、大沼駅を過ぎるとまもなく大沼、小沼が左右に望まれたが、湖上は無数の島々を浮かべ、駒ヶ岳の尖峰を水面に映し、さすがは道南随一を誇る大沼国定公園の趣をそなえていた。しばらく進むと虻田駅、ここは洞爺湖温泉行きの乗替え駅で、このあたりから昭和19年に突如大爆発を起して溶岩を噴出し、ついに450米の噴火山を形成し、今なお盛んに白煙をふいており、私たちの世代には実に珍しい「昭和新山」が望まれた。

これより登別、千歳飛行場を過ぎ太陽が真上に昇るころ目的地札幌に到着した。

札幌市は明治2年に7名の居住者がいたのみであったが、外人技師などの手により首都としての計画的な建設により街路は基盤の目のように整然としており、道路には至る所アカシヤの街路樹が茂っており、現在は45万人の人口を擁し、東京以北随一の近代都市として発展しているのには驚いてしまった。

私たちの旅の疲れをいやす所は北海道大学横の「あけぼの旅館」であったが、午後1時から第6回統計図表全国コンクール入選作品展示会が開かれるので、北海道名

産雪太郎を口にほうり込み、熱い茶で喉を湿し、さつそく旅館を出て会場に臨んだ。

入選作品37点は、さすが我が国最高の作品だけに構図美観ともにすぐれており非常に感銘を受けた。

その夜は旅の疲れと同時に、日中の暑さはどこえやらの涼しさのため、ぐつすり眠ることができた。

翌8月9日は快晴

私たち統計マンの祭典である恒例の第9回全国統計大会は道立スポーツセンターにおいて開催、定刻9時には、参加者3,100名の多さを数え、本県よりの参加者は43名に達した。

田中北海道知事の挨拶にはじまり、大内賞その他の表彰が行われ、本県の実績者は次ぎのとおり

全国統計協会連合会長賞

常陸太田市役所 会沢幸子氏

通商産業大臣賞

茨城県（工業統計調査）

次いで祝詞、授賞者代表謝辞などが行われ、議事に入り、札幌市長が議長に選ばれ、提案者から議題の説明があり、直ちに全議案を審議委員付託とし、午前の日程を終了した。

午後1時から研究発表に入り、本県から日立市役所沼田広報統計係長の「日立市民の生活実態と生活評価の変化について」と題して研究発表が行われ、万雷の拍手を浴びた。

次いで議事を再開し、委員付託となつた議案の審議経過について審議委員長から議案全部を採決し、その実現方について強力に推進すべき旨の報告があつた。

さらに美濃部統計基準局長から翌年行われる第10回全国統計大会の開催地を大阪府に決定した旨の報告があり次いで宣言、決議を万場一致で可決し、法政大学長大内兵衛先生の「年金制度の確立」と題する記念講演があり最後に統計発展のための万才三唱によつて札幌市における第9回全国統計大会の幕を閉じたのである。

私たちはこの意義ある大会により統計の重要性を再認識して、夏の北海道を去つた。 (S. H記)

第9回全国統計大会決議

われわれは、統計事務に従事していることに高い誇りと大きな喜びを感じる。それは、われわれの作成する統計が、わが国の政治経済を発達させる原動力となつているからである。また宇宙の秘密に挑戦する原子力時代の新しい科学技術も、統計の力をかりることなくしては、その歩みを進めることができないからである。さらにまた、われわれの作成する統計が、世界の国々のわが国に対する理解と信頼をつちかい、ひいては、わが国の国際地位の向上をもたらすものであることを確信しているからである。

かえりみれば戦後わが国において、統計制度改善の企てが緒について以来既に12年、この間わが国統計の発達はまだことにめざましいものがあつた。しかし、これを諸外国のそれと比較するとき、われわれは必ずしも安閑として現状に安堵することはできない。

統計の整備と利用について、いくたの問題が存することを卒直に認識し、これが改善に渾身の努力を傾注しなければならない。

ここに思いをいたせば、われわれの仕事の誇りと喜びの存ずるところに、さらに重大なる責任の存ずることをも、われわれは自覚しなければならないと考える。

時あたかも第9回全国統計大会が開催せられるに当り、われわれは一致協力してその重責を全うする覚悟を新にするため、ここに次のとおり決議する。

決 議

1. われわれは、わが国の統計が同時に世界の統計であることを認識し、眼を広く世界にひらいて新たな統計技術の研さんにつとめる。
1. われわれは、統計に対する国民の理解と関心を一層深めるため、統計教育の充実を図り統計の民衆化につとめる。
1. われわれは、統計の企画にあたつて社会の要求を正しくよみとり、その実施にあたつては緊密に連繫し、その結果をあますところなく国民生活の向上に活用するようにつとめる。

昭和33年8月9日

第9回 全国統計大会